

<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」
Ver. 2-036 号（通巻 267 号）

「ジョン万次郎と新島襄」

— 二人を知る谷村鯛夢(和典)氏が明快に分析、解説 —



谷村鯛夢(和典)氏は『漂流紀畧（ひょうそんきりやく）全現代語訳』の刊行で注目されている同志社人で、1972年（昭和47年）文学部文化学科美学・芸術学専攻を卒業。

この「漂流紀畧」の表紙には、「ジョン万次郎・口述 河田小龍・記述 谷村鯛夢・現代語訳 北代淳二・監修」と表記されている。即ち、谷村鯛夢(和典)氏はジョン万次郎が語り、河田小龍が書き留めたものを現代語に直されたのである。

また、この本が「講談社学術文庫」であることに注目したい。内容の信頼性が高いと言うことである。174頁、800円（税別）の文庫本で気軽に手にできる。昨年12月の刊行後、8月現在で6刷りとなっている。

この本の特徴は、ジョン万次郎自らが語っているところで、そこが第三者が書いた漂流物語とは異なる。加えて、多くの挿絵があることが興味をそそる。挿絵はこの書物の記述者で当時、土佐藩随一の絵師、知識人であった河田小龍である。

ともあれ、ご投稿いただいたものは、自己紹介から始まり、同志社大学での生活、仕事のこと、そして、ジョン万次郎との出会い。最後に、<< 「中浜万次郎」の夢と「新島襄」の実践 >>で結ばれている。

「初めてアメリカの市民レベルの教育を受けた日本人」

と「初めてアメリカの大学を卒業した日本人」

谷村 鯛 夢

●土佐・室戸岬の少年は、京都に憧れていた

1972年（昭和47年）文学部文化学科美学・芸術学専攻を卒業しました谷村和典です。現在の名刺の肩書きは出版プロデューサー、コラムニスト、俳人となっていますが、俳句のブログ活動も展開していますので、書き物や講演などは俳号である谷村鯛夢で行なうことが多くなりました。

今般の「漂異紀畧 ひょうそんきりやく 全現代語訳」（講談社学術文庫）も、表紙のクレジットは、「ジョン万次郎・口述 河田小龍・記述 谷村鯛夢・現代語訳 北代淳二・監修」という形になっています。なお、昨年12月の刊行後、8月現在で6刷りとなっているという現況にあります。

この著作についての話は、ここから紹介しないと繋がりませんので申し上げますが、私の生まれ故郷は高知県の室戸市室戸岬町。市とは言え、弘法大師空海の修行の地、まさに空海、空と海しかない大僻地、台風銀座で知られる土地で、つまり谷村は高知県人、土佐人で、ジョン万次郎や河田小龍（坂本龍馬の師匠）と同郷の人間だというわけです。ここが、今回の話の基本ラインですね。

この室戸岬地方などの高知県東部、紀伊水道側の地域は、テレビやラジオの電波が関西キー一局エリアで、高知県でありながら「放送文化」においては完全に関西圏。そうした中で、少年少女たちは、都会といえはまず大阪・京都・神戸に親近感を持ちながら成長するといった環境にあったわけです。

高校は、室戸市から県都である高知市に出て、県立の伝統校、進学校と言われている高知追手前高校に進学。ここは入学時から希望で「文科」と「理科」にクラスを分けます。もちろん、私は「文科」。それも勝手に「私立文系」を決め込んでおりました。

要するに、理数系が嫌い、したがって国公立用の受験勉強はしたくない。ということで、授業とは関係なく、好き放題に社会（世界史・日本史）系と国語系（現代国語・古典）の本を読みまくっていたわけです。気分は、もうすっかり早慶か同志社の文学部。私立文系となれば、それはもう当然のイメージでありました。

そうして受験期、早慶にするか同志社にするか。決め手は、やはり「京都」でありました。世界中の人がお金を出してやってくる京都に、親のすねかじりで、旅行ではなく「四年間、住む」。歴史と伝統文化が息づく京都に毎日いて、その空気を吸う。これは、やはりめくるめくような「素敵なイメージ」でありました。

一方、東京は、「出版社に就職して仕事をするとこころ」、つまり卒業後には結局行くところなのだから、22歳から暮しても十分「東京の青春」は満喫できるだろう。そして、同志社

ならば、同僚に早慶などがいても、まあ、遜色はないだろうし、あとは腕次第よ。そんな能天気なことを考えておりました。

●1970年前後の今出川キャンパスは面白すぎて

いずれにせよ、一生をイメージしてみても、この機会を逃せば、「4年間、京都で暮す」ということは、まずあり得ない。これは、もう、父母に感謝しながら、同志社に行くしかないでしょう、ということで、そして、もちろん好きで、文学部文化学科美学・芸術学専攻(現・美学・芸術学科)に入れて頂いたわけです。もしや、ということも考えて法学部政治学科も入れて頂いていて、高校の先生や両親ははっきり法学部に行くんだろーと思っていただろうのですが、私は最初から美学に行くつもり。母親に「美学ちゃ、何するところぜよ」と嘆かれましたが。

しかしまあ、ちょうど激動の時代といえますか、1968年(昭和43年)4月から1972年(昭和47年)3月までの4年間というのは、面白すぎて、ほとんど教室で勉強した記憶がありません。主任教授だった金田先生の授業はまるで覚えていませんけれど、当時助教授だった郡定也先生(後に教授)や専任講師だった中村啓治先生(後のNTTコミュニケーションセンター副館長・学芸部長・美術評論家)、大学院生だった木下長宏さん(後の横浜国立大教授・美術評論家)といった方々には親しくしていただきました。今に続く文化意識の基本を作っていたいただき、感謝しております。

4年間、ときどき路上を駆け足したり上京したりもしておりましたが、基本的な活動と例えば、文学部の学生のご多分に漏れず「同人誌」の発行ということになると思います。今から思うと、もう少しましな名前はなかったかいなと思いますが、その同人誌の名前が「のん」。いかにも70年安保前後の雰囲気満載ですね。ここを根城に美学と哲学の学生7、8人が詩人や小説家を気取っておりました。

この同人誌「のん」の仲間、熊本・九州学院の院長を長く務め、数年前の「同志社フェアIN熊本」で中心的な働きをしてくれた内村春君がいます。彼は哲学専攻のクリスチャンで、仲間の中ではやはり超真面目派。いつもイエス様のような深い眼差しで、安酒ばかり呑んでいる我々をたしなめてくれたのであります。

●女性誌の編集長から出版プロデューサー、俳人へ

そうして、私小説作家の葛西善蔵論を軸にした卒論を何とか仕上げ、22歳の春に上京、以降、30数年間を女性誌の編集者・編集長、この15年ほどは書籍・新書・文庫の出版プロデューサー、編集者、物書きとして出版界で過ごして参りました。

その大半を過ごした婦人画報社は、メジャーな女性誌としてはもっとも長い歴史を持つ婦人画報(1905年・明治38年に国木田独歩が創刊・編集長)を中心とした雑誌主体の大手出版社で、当時アイビーブームの中で圧倒的な人気を誇っていた「メンズクラブ」なども発行していました(もちろん、現在も)。

55歳の誕生日に、この婦人画報社を部長職で退社。若い頃から「阪東玉三郎対談」とか「名旅館・名女将」シリーズなどをヒットさせ、ファッション、美容、リゾートなどの取材で

世界中を巡ったりして、雑誌に関してはかなり「やり尽くした」感がありました。一方で、編集者としてはずっと雑誌暮らしで、単行本や新書、文庫などは一度も手がけたことがなかったな、という感慨もありました。同じ「編集者」とはいえ、雑誌のそれと書籍ではまるで世界が違います。同じ会社においても、ほとんど接触がないというのが実情です。

2005年にフリーランスの出版プロデューサー、編集者となって以降、小学館の「週刊百科・日本の歳時記」などを含めると、150点近くの書籍を世に送り出してきました。

その中に例えば、同志社キャンパスに隣接する冷泉家の冷泉貴美子さんの「守る力」(集英社新書)もあります。千載集の藤原俊成、新古今集の藤原定家父子を家祖とする歌道の家元のお公家さん。学生のころは、この古ぼけた屋敷は何?とっていたものでした。「御所のそばですから、幕末の禁門の変の頃などは薩長の鉄砲、大砲の弾が飛び交う中で松ヶ崎に避難したそうですが、70年安保の頃の同志社キャンパスもそんな感じで、国宝の古文書を燃やしたらいかんとヒヤヒヤしてましたわ」という冷泉さんに、「すみませんでしたねえ」と心の中で謝っておりました。

●「ジョン万次郎」との出会いと「漂異紀畧 ひょうそんきりやく」

そうした中、2015年にたまたま出た「高知県人の集い」でジョン万次郎研究の第一人者・北代淳二さんと出会います。「高知県人の集い」ですから、北代さんも当然高知県人ですが、話してみると何と同じ高知追手前高校卒の大先輩。昭和7年生まれで、国際基督教大(ICU)の第一期生。TBSのワシントン支局長、ニューヨーク支局長、TBSアメリカ社長などを歴任、TBSのJNN報道特集の初代キャスター。このときは、土佐史談会関東支部長ということでした。土佐史談会は1917年設立のれっきした歴史研究団体で、私も誘われて早速入会。ここで、「ジョン万次郎」テーマと出会うことになります。

江戸後期、14歳で土佐湾に出漁中、足摺岬沖で遭難、室戸岬を最後の土佐の姿と見ての漂流以来、アメリカ捕鯨船に救助され、アメリカ東部で日本人で初めて「市民レベルの教育」を受け、捕鯨船幹部船員となって世界の海をめぐり、まさに鎖国の幕末日本からすれば「40年先の未来社会」で生き、そして12年ぶりに奇跡の帰郷を果たした「ジョン万次郎」。

そのジョン万次郎の土佐への帰国直後の語り下ろしを、あの坂本龍馬の「先生」河田小龍が聞き取り、絵入りで書きまとめた書物が「漂異紀畧 ひょうそんきりやく」。現在、「正本」は行方不明、「写本」がいくつかのパターンで遺っているのみという稀代の一書。

これを、共に高知県人の谷村鯛夢が全現代語訳をし、ジョン万研究の第一人者北代淳二さんの監修で、講談社の学術文庫より昨12月に刊行した、というのがことの大略です。

「漂異紀畧」は、すべての“ジョン万次郎”物語のルーツとなった書物ですので「面白くないわけではない」のですが、それより何より、あの山内容堂を驚かせ、幕末の緒大名を驚かせ、幕府を驚かせた本邦初の、本格的「西洋事情」ドキュメンタリーであったと思います。

遭難という偶然ではあったものの(これが万次郎の、いわばタイムマシーン)、この頭のよい、生命力に優れた少年は「デモクラシーのアメリカで初めて市民レベルの教育を受けた

日本人」となり、当時のグローバル産業（メルビルの“白鯨”と全く同時代）であった捕鯨船の幹部船員になって、スエズもパナマもまだ抜けていなかった時代の世界中の海をめぐり、合衆国東部海岸の先進都市ボストン近郊を中心に10年を暮し、ゴールドラッシュのカリフォルニアで自ら金を掘って帰国資金を一気に作り、そしてハワイ経由で帰国（身分社会の日本へ逆戻り）を果たすわけですから、「40年先の未来社会」とのタイムスリップ、バックツァーフューチャー物語とって も過言ではないと思います。

だからこそ、この信じられない知識と技術を身につけて帰ってきた（ペリー来航の直前という奇跡、とは司馬遼太郎氏の言）元漁師を抱えこもうとして土佐藩はすぐに藩士とし、それをすぐに幕府は直参旗本として引き抜いていったわけです。

そういった極めて文化的価値の高い書物なのに、これまで研究者が抱え込みすぎという感じがありましたので、私は、「古事記」や「解体新書」などの現代語訳がある講談社の看板文庫である学術文庫に入れて、この書物の価値の高さを位置づけようと思ったわけです。

その上で、この幕末の壮大なドキュメンタリー、とんでもない見聞録を誰でも読める物にしたい（だいたい、題名が読めない・笑）、特に若い人も手に入れやすい廉価な文庫本で普及させたい、という思いを込めたプロジェクトにしました。2年かかりましたが、まあ満足しています。

●それは幕末の「驚愕の世界見聞録」だった！。しかし「ギューアムとはどこだ？」

とにかく、170年前の書物ですから、基本的に漢字ばかりの文語、それも今はほとんど目にする事のない画数の多い漢字、しかもまったく段落、改行がない。どこが地の文で、どこが感慨なのか判然としない。地名が基本的に万次郎の耳から入ったものである（オアホー＝オアフ、ギューアム＝グアムなどはやさしいほう）、同様に人名も同一人物と目される人でも表記がまちまち。帆船航海専門用語の多などなど、いわゆる標準的な現代文に「訳」するにはさまざまなハードルがありました。

この件、たとえば高校の古文の先生レベルならば、現代の普通の文章にするためにそれほど高いハードルではないかもしれませんが、しかし、その文章が、読者がお金を出して買ってくれるレベルのものなのかどうか。ここはなかなかむづかしいところです。多分、面白くない、何のニュアンスもない、味気ない、単なる普通の現代文になるでしょう。

このある意味「奇書」ともいえる書物の面白さをそこなわずに、なおかつ第一級の史料としての価値に傷をつけずに、多くの読者の胸に響く文章を書かなければならない。とすれば、本書の企画者であり、編集者であり、文語に親しんでいる俳人であり、プロの物書きでもある私がやるのが一番いいのではないか。そういう結論に至りました。

ただ、ものを書き始めるには、書く本人が何らかのモチーフ、リアリティを掴む必要があります。私にとってのそれが、「漂巽紀畧」の冒頭、漂流を始めるあたりの一行にありました。

足摺岬沖に出漁中、嵐に遭って航行不能になり、一晚流されて、明けて室戸岬沖。ここは捕鯨で知られるところで、鯨発見のための「山見」という番小屋があり、極めて視力のいい

男たちが見張っている。何とか自分たちを見つけて救助船を出してくれないか。万次郎たちは土佐の最後の陸地を見ながらそう願うのですが、その「山見」の跡地が私の故郷にしっかりと遺っているのです。というか、今は「廃校水族館」として有名になったわが母校小学校へは、その「山見」の下を毎日通っていったものでした。

そうか、万次郎たちはこの「山見」の沖を流されていったんだ、そして黒潮の奔流に乗り、鳥島まで流されていったんだ。そう思ったとき、一気に書く気力が沸いてきたのを覚えています。

おかげさまで「漂異紀畧 ひょうそんきりやく 全現代語訳」はNHKの書評など望外の好評を得、ただいま順調に版を重ねています。そうした中で届いたさまざま反響で、一番多いのが、「ジョン万次郎の話はおおよそ知っているつもりだったが、ほんとのところが分かって、こんなに奇想天外、こんなに面白い話とは思わなかった。ついては、ぜひ、続編を読みたい」というもの。しかし、残念ながら「漂異紀畧」はここまで。土佐に帰って母に会い、お侍になった、というところでおしまいです。

万次郎は、琉球への強行上陸以後、薩摩の取り調べなどでは当時の開明派・島津齊彬から「上客扱い」を受けています。鎖国の禁を犯した元漁師とはいえ、この人物は「西洋のとんでもない知識・技術を身につけて帰ってきた」非常に貴重な人材であるとの認識です。それは土佐藩も分っていたわけですが、ペリー来航の情報を得た徳川幕府はすぐさま万次郎を幕臣旗本「中浜万次郎」として取り立て、「アメリカ情報」を得ようとしています。また幕府の「知っている人たちは」万次郎の知識と技術を現実に生かそうとします。

しかし一方で、水戸斉昭のように「奴はアメリカのスパイである」と敵視する大物もいて、幕臣「中浜万次郎」の人生ははちょっと苦いニュアンスを帯びたものになっていきます。

●「中浜万次郎」の夢と「新島襄」の実践

私は、現在、中浜万次郎国際協会にも所属していますし、同志社東京校友会の常任幹事でもあることから、中浜万次郎と新島襄を合わせて紹介する機会もたびたびあり、そういうときには「中浜万次郎、日本人で初めてアメリカの市民レベルの教育を受けた人」「新島襄、日本人で初めてアメリカの大学を卒業した人」というような、極めてシンプルなご案内をしています。

あの国民的小説「竜馬がゆく」では、幕府の軍艦操練所の教授となった万次郎と勝海舟の書生になった坂本竜馬が操練所で出会い、土佐弁で語り合ったが江戸っ子の勝にはさっぱり分らなかったという、いかにも青春小説らしい描写が入っています。しかしこれは、まさに小説で、先の北代さんによれば「そういう史実、記録はない」とのこと。

ただ、当時のグローバル産業であったアメリカの捕鯨船で幹部船員として世界の海を渡った万次郎は、まさに当時の第一級、第一線の「船乗り」であり、軍艦操練所で最新の航海術の理論と実技を教えたのは事実。そして、新島襄も航海への興味から世界への眼を開き、1860年、18歳のときに軍艦操練所に入ります。これも、事実です。当時の有為の青年

たちにとって、大型洋船と航海術は新世界へのパスポートでした。

1860年、安政7年といえば、咸臨丸の太平洋横断という「壮挙」があります。勝海舟が艦長で、日本人水兵が約100人、これで「初めて日本人の手で太平洋を渡った」のだ、とされてきました。しかし、事實は、外洋渡航を知らない日本人は全く役に立たず、勝などはひどい船酔いで倒れたまま。実際はアメリカに帰るために同乗していた(とされるが、実は技術アドバイザー)米海軍のブルック大尉以下米兵10名、そしてその通訳として乗船していた万次郎が操船して荒海を乗り切り、サンフランシスコに辿り着いたのだという事実が後年明らかになりました。大洋を大型帆船で駆け巡るアメリカ海軍軍人と捕鯨船乗りの「すご腕」が実証されたエピソードといえるでしょう。

事実だけ記せば、咸臨丸は1月に浦賀を出港、5月に帰国。そして8月に万次郎は軍艦操練所の教授を辞していますから、この5月から8月の3ヶ月間の中で、新島は万次郎の教えを受けていたと考えられます。北代さんも「その可能性はある」としています。

また、同志社OBで歴史家の大越哲仁さんは「新島襄と中浜万次郎」という論文で、新島が軍艦操練所で受けた航海術や数学、理科などの影響に言及し、また、英語も教えていた「中浜万次郎塾」に出入りしていたことを指摘。同志社に遺る新島のノートには軍艦操練所で習ったままの筆記が見えるとしています。

そして、総体として「海外渡航は国禁であるが、大きな成果を持って帰ってくれば罰せられるのではなく、評価をもって迎えられる」という、いわば「成功のモデルケース」を新島は万次郎に見た、そういう影響を受けた、と論じています。

私も、それは言えるだろう、と思います。万次郎の「漂異紀畧」に書かれた西洋文化・文明は、数々の異本も含め、多くの幕末の青年に影響を与えたのだらうと思いますし、とりわけその本人に直接教えを受けたとなれば、その頃の日本人とは違う雰囲気、語る言葉のリアリティなども含め、受ける影響の大きさは測りしれません。中でも、咸臨丸での久しぶりの「アメリカ」から帰ってきたばかりの軍艦操練所での授業は最新の情報とともに熱気あふれるものであったと思われます。そして、新島はその授業を受けたのではないのでしょうか。

万次郎は、世界の広さを教えてくれました。また帰国時に持ってきた物の中に初代米大統領のジョージ・ワシントンの伝記があったことが語るように、人間の平等、共生も日本人に伝えようとしたのではないかと思います。

「漂異紀畧」で万次郎の話聞き出し、書きとめ、鮮烈な絵を添えた河田小龍は、若き日の坂本竜馬に万次郎から聞いた世界と世界の海を渡ることの大切さを教えたとされています。そして、竜馬は明治維新が成った暁には新政府には入らず「世界の海援隊でもやりましようかな」と語っていたという逸話があります。その夢は万次郎が伝えたかったことのひとつだったと思いますが、残念ながら竜馬暗殺によりついに結実しませんでした。新島襄は、万次郎から受け取ったと思われる「夢」に向かって果敢に「脱国」し、日本に世界の文化の「実」を持ち帰ったと言えるのではないのでしょうか。

新島襄に繋がる皆さんが今、ジョン万次郎・河田小龍の「漂異紀畧 全現代語訳」からど

ういったメッセージ、夢を受け取られたか、ご感想を聞かせていただければ、本書の刊行に尽力した者として、同志社OBの一人として、これに勝る喜びはありません。

ぜひ、小さな文庫本が皆さんのお手元に届くことを祈っております。

1972年文学部卒・谷村鯛夢(和典)